日で抜去となった。4ケ月後のCTでも増悪は認められていない。副作用もほとんどなく，当院で行ったエタノール注入療法の症例と比較し同等の効果が得られ，今後も試みる価値のある治療法と考えられた。

43. 当科におけるC型慢性肝炎に対するインターフェロン療法の現状第3報

国吉　孝，関　秀一，大久保裕司
工藤卓也，窪田賢輔，中尾圭太郎
星本相浩，岡　浩之（横浜労災）

当科におけるC型慢性肝炎213名に対し，インターフェロン（IFN）療法を行った。セロタイプによる比較ではグループ1に比しグループ2が有意に著効率が高く，製剤別による比較ではIFN-αがβに比し有意に著効率が高かった。5年間の経過観察症例では血中ウイルスが消失した症例ではGPT正常化が持続するが，消失しない症例で再びGPT異常をきたす傾向がみられた。また，血小板，アルブミン値の低下はほとんどなかった。

44. Fitz-Hugh-Curtis症候群の1例

日暮真由美，小方信二，蓮沼桂司
宮城英慈，伊能崇税，西口　弘
遠藤哲也，上市英雄，前澤善朗
（成田赤十字）

Chlamydia Trachomatisによって肝周囲に局所的な腹膜炎を起こすFitz-Hugh-Curtis症候群は特徴的な右悸肋部痛を起こすことが知られている。今回全腹部痛で発症した本症候群の1例を経験した。1978年以降に国内外で発表された全157症例について検討したところ，痛みの部位にはかなりばらつきがあり，鑑別疾患の非常に多い紛らわしい病態を呈する疾患であることがわかった。

45. 十二指腸静脈瘤破裂の1例

橘川嘉夫，山崎康朗，田辺雅章
細江信央，古川崇子，高田伸夫
佐藤　隆，古部　勝，冨田玖夫
（東邦大佐倉）

症例は48才女性。アルコール性肝硬変にて外来通院中，突然の意識消失にて救急車来院。緊急内視鏡にて十二指腸静脈瘤と出血点と思われる粘膜欠損を認め，十二指腸静脈瘤破裂による肝性昏睡と診断。EVLにて治療した。一旦は止血を得，肝性昏睡よりの離脱をみたが入院25日目に再出血，再び昏睡に陥った。経皮経肝門脈造影を行い下膵十二指腸静脈を供血路とする静脈瘤を造影，塞栓術を行うもショック肝を併発し8日目に死亡した。

46. 当院における食道静脈瘤に対するEVL・EIS併用療法の治療成績

大久保裕司，岡　裕之，星本相浩
中尾圭太郎，窪田賢輔，工藤卓也
国吉　孝，関　秀一（横浜労災）

【目的】食道静脈瘤に対するEVL・EIS併用療法の有用性と安全性を明らかにする。【対象】28例の食道静脈瘤合併肝硬変【結果】本療法は，繰り返し行う必要があると思われた。重篤な合併症は無く，経過観察中の静脈瘤破裂は無かった。【結語】本療法は有用で安全と思われた。

47. 高齢者の早期胃癌に対するEMRC法による内視鏡的粘膜切除術の検討

桑原憲一，藤田昌敏，山崎健也
徳山芳治，三上恵只（小見川総合）

高齢者の早期胃癌，胃腺腫に対して，広口斜め爪付き型透明キャップを用いたEMRC法によるEMRを施行した。正面視が困難な体上部後壁や体下部小弯の病変にも容易に施行でき，分割切除も短時間に容易に施行し得た。病変の大きさ，組織型等EMRの適応を守り，十分量の局注を行い，内視鏡的止血術に熟練していれば，安全で侵襲が少なく，コストも安く，今後さらに内視鏡的早期胃癌根治術の有力で有用な方法になると考えられた。

48. 慢性炎症所見を呈し，巨大脾腫を合併したリンパ管腫の1症例

伊勢美樹子，石井昭広，熊谷匡也
酒井　力，高木敏之（県がんセンター）

38歳女性。貧血，巨大脾腫と脾内多発性腫瘤高ガンマグロブリン血症の精査目的で当科に入院した。生下時から右下肢にリンパ管腫があり幼少時に切除されたが残存している。また24歳時に子宮のリンパ管腫を診断されている。脾以外に病変認めず脾摘を施行。組織学的にリンパ管腫で，間質に著明な形質細胞浸潤を認めた。生下時は右下肢にのみ存在したリンパ管腫が長い経過で子宮，脾に発生し，強い炎症所見を伴った，稀な症例である。